

本日は汚れた霊につかれた娘の母親と、耳が聞こえず口のきけない男性の二人の人物がイエス様に出会い、恵みを受けた箇所になります。このみことばから共に教えられてまいりましょう。

1. 主の導き

「イエスは立ち上がり、そこからツロの地方へ行かれた。家に入って、だれにも知られたくないと思っておられたが、隠れていることはできなかった。ある女の人が、すぐにイエスのことを聞き、やって来てその足もとにひれ伏した。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれていた。彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださいようイエスに願った。(24-26)

イエス様はガリラヤ地方からツロという北にある異邦人の地に行かれた。すぐに汚れた霊につかれた娘を持つ女性がイエス様の事を聞いて訪れ、足元にひれ伏した。

まずこの女性について。女性はシリア・フェニキア生まれのギリシャ人でユダヤ人にとってこの女性は異邦人。さらに当時は女性の身分は低かった。この汚れた霊につかれた娘の母親の思いはどうだったか？娘の事で母親は周囲から不当な扱いをされ人生はめっちゃくちゃ。娘も荒れ狂った言動をし、母親はどうして良いか途方に暮れる状態。しかし母親は娘がどういう状態であっても我が子を愛し耐えることができた。そのため女性はイエス様の噂を聞くとすぐにつけ御元にひれ伏し願った。そして彼女は娘が正常に回復するようにイエス様に切に願った。女性はユダヤ人にとって軽蔑されている異邦人であり、また女性という低い身分を十分にわきまえていた上でイエス様の所に来た。その行動はとても勇気のいる事。

しかしその女性に対してのイエス様の反応は意外なものだった。

「するとイエスは言われた。『まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。』」(27)

子どもたちと小犬は誰のことか？子どもたちとはイスラエルの民で小犬とは異邦人の事。この意味はまずイスラエル人たちに福音が語られ救いに導かれる必要がありその後で小犬であるあなた方異邦人が救いにあずかるのであると。つまりあなた方は後回しだから待っていなさいと言われたということ。しかし女性とその娘は今苦しみ、助けを求めている。女性はイエス様なら何とかしてくださいと思ひ御元に来た。なぜイエス様はこのような言葉を言われたのか？普通に聞くと冷酷な言葉に思う。けれどもそう言われた女性はイエス様に答え、その言葉からイエス様の考えていた事を読み取る事ができる。

「彼女は答えた。『主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。』」(28)

普通なら怒って帰るのでは。けれども女性は何を言われても娘を助けて頂けるなら、おこぼれだけでもと必死だった。イエス様の意図は何だったのか？それはこの女性の心をご存知であったイエス様が彼女にその心のうちにある言葉を引き出すため。つまり絶望の中で神の御子であるイエス様により頼む以外に助かる方法はない事を彼女自身が告白するため。その信仰によって娘の中に取りついている汚れた霊を追い出す事ができるため。だからイエス様は女性にはっきりと信仰を持たせるために冷酷とも言える、試すような言葉を言われたということ。

私たちが時に冷酷とも思うような出来事が人生の中で起こる事はないか。祈っても状況は何一つ変わらなく神に見捨てられたと思うことがあるのでは。しかしそれは神が私たちを見捨てたのではなく、私たちの信仰が試されている時。神は私たちに信頼する事を願っておられる。

プライドが傷つくような事を言われた女性の反応は冷静であった。なぜなら女性はそのような事を重要視していなかったから。信仰生活の中でプライドを持たずに生きることは重要な事。自分は優秀な者だと思ふそのプライドが信仰生活、また神を信じる上で障害になる。この女性は自分のプライドでつまづくことはなかった。そして何よりもこの女性がつまづかなかったのは、イエス様が救い主であり、このお方以外に娘が癒される道はないと知っていたから。だから「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」と答える事ができた。普通に聞く分には、惨めだなと思う。けれどもこの言葉から彼女は本気でイエス様が救い主であると告白している事が分かる。

さらにこの女性から教えられる事はパン屑の信仰。全てをもらえなくてもパン屑のおこぼれで良いという信仰。なんと謙遜な事か。私たちはどうか。自分は優秀なので、あの人よりも良い物が与えられるべきと考える。けれども謙遜な人は私はあなたの前にさえ出るのに相応しくなく、お願いできる身分でも無いことは分かっています。しかしせめて主のお言葉だけでも頂けないでしょうか。そうす

れば助かりますと。それがパン屑の信仰。このようなイエス様を驚かせる信仰を持っていたのは 100 人隊長とこの女性のみ。主の恵み、みことばは私たちにとって何にも勝り価値のあるもの。私たちも主のみことばには力がある事を本気で信じ歩んで行く者とされたい。

『そこまで言うのなら、家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。』彼女が家に帰ると、その子は床の上に伏していたが、悪霊はすでに出ていた。(29-30)

これまではイエス様が汚れた霊に命令され解放されたが、そうではなく女性がそこまで言った言葉(信仰)によって娘の汚れた霊を追い出す事ができた。「そのとき、イエスは彼女に答えられた。『女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。』彼女の娘は、すぐに癒やされた。」(マタイ 15:28) あなたの信仰は立派と誉められ、イエス様を信じる彼女の信仰によって娘が癒された。

私たちは自分たちの現実をみると諦めたくなるような事があるかもしれない。祈っても願いが聞かれず、神は冷たいお方だと感じることもあるかもしれない。けれどもイエス様は決してそうではないと言われている。これからも救いはイエス様にしかないことを信じてこの女性のように謙遜な信仰、恵みに信頼する信仰を頂いて共に歩んでまいりましょう。

II. 主の深い愛の配慮

「イエスは再びツロの地方を出て、シドンを通り、デカポリス地方を通り抜けて、ガリラヤ湖にいられた。人々は、耳が聞こえず口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださいと懇願した。」(31-32)

当時、障がいのある人は酷い差別を受けたり、問題視されたりと辛い思いをしていた。その中で彼が自分の存在意義を見失い、孤独で寂しく絶望感で苦しんでいた事が想像できる。この男性が出来ることは見ることと感ずることだけ。そのため、彼は人の表情や雰囲気を感じ取る事に敏感だったはず。しかしそれ故に誤解して傷つくことも多々あったはず。何かを感じても話すことも、聞く事もできないため、事実を確かめる事ができなかった。しかし幸いなことにその男性には彼を心配し思ってくれている人たちがおり、彼らに連れられてイエス様の元に来ることが出来た。そして彼らはイエス様に男性をいやして頂けるように誠意を込めてお願いをした。

「そこで、イエスはその人だけを群衆の中から連れ出し、ご自分の指を彼の両耳に入れ、それから唾を付けてその舌にさわられた。」(33)

するとイエス様はその男性だけを群衆の中から連れ出した。他の場合は群衆がいる中でいやしが行われ、たがなぜ彼を連れ出したのか？それは話せず聞くこともできず、人々から酷い差別をされ苦しんで来た男性へのイエス様の配慮。見世物扱いになり傷つく事を避けた配慮。愛の配慮。

イエス様は彼だけを連れ出し、そして、彼の両耳に指を入れ、さらに指に唾を付けて彼の口を開けさせて舌を触られた。なぜイエス様はこのような不思議な行動をされたのか？この人は聞く事も話す事も出来ず、イエス様が話されても分からず、イエス様も意思を伝える方法がなかった。先程の娘が助けられた女性のように信仰を言葉で教える、会話する事が出来なかった。そのため、この男性にイエス様が意思を伝える方法は視覚と感覚であった。だからイエス様は両耳に指を入れ、耳を癒す事を示し、言葉は聞こえないので自らの指に唾を付け、舌を触られて舌のもつれを治す事を示され癒された。それはイエス様の深い愛の配慮。イエス様はそれぞれに合ったやり方で癒して下さり、究極的にはイエス様は罪故に滅びるに過ぎなかった私たち人間のために自らの命を捨てられ、全ての人が救われる道を与えられたお方。

「そして天を見上げ、深く息をして、その人に「エパタ」、すなわち「開け」と言われた。すると、すぐに彼の耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話せるようになった。」(34-35)

イエス様はこの男性が見て分かるように、天を見上げ深く息をして祈りました。「天を見上げ」とは全ての恵みは神から与えられる事を示されたということ。「深く息をして」とは呻き、嘆息の意味。イエス様が自らを彼の立場に置き、その苦しみを自らの逼迫(ひっぱく)した苦しみとして神の前に示された。そして「エパタ」(アラム語)、「開け」と言われるとその男性の耳が開け、舌のもつれが解け、会話できるようになった。

主は私たちが絶望的だと思いつめてその只中にいてくださる。ですからどんな時も誰よりも気にかけて大切に思いそして最善に導いてくださる主により頼み信頼し平安の中を歩ませて頂きましょう。